

国語教師 大村はまのことば

大村はまの著書より

荻谷夏子

1, ほんとうの言語生活者にしたいと思いつめていただけです。ことばをほんとうの意味で使える人が、人間らしい人だと思います。人間らしさをほんとうに持った人にしようと思うと、もうそれでいっぱい、それこそ手段を選ばず、どんなことでもしてそこへもっていこうという気持ちになってやってただけなのです。…ほんとうに私はそういう責任を痛感していたと思います。それは、私が教師であれば、その責任を忘れたならば、教師でないことになると思います。

2, 教室には、非常に引き締まった気分を作る工夫をしないといけないと思っています。引き締まっているということ、固いのでも怖いのもないのですけれども、きりっと引き締まっている、そういう気分をつくりたいと思いました。

3. 国語教室が楽しくなければいけないのは、楽しくない心は何も本気で考えられなくなりますし、何も覚えられなくなってしまうからではないでしょうか。……楽しくないということは、つまり、教育ができないということです。楽しくない子どもが、何を考えるというのでしょうか。字一つ覚えそうもありません。ですから、どうしても、それは国語教室でなくても、楽しくなければならぬのです。私はそのことを、素朴なことです。本気で考えたいと思います。楽しくない教室は、教室にならないということを考えなければならぬと思うのです。

4, 子どもはどんな時でも、自分が打ち込んで一生懸命になっていることでなければ、ものを考えないし、ことばの力もつかないし、なんにも覚ええないと思うのです。覚えるということだけを考えても、やはり印象に残る時、感動している時でなければ、ものを覚えることはないのではないかと思います。

5, 本で習うとか、そういうことでなくて、なま身の先生が、そこに同じ呼吸をしながら生徒といるということのいちばんの効果は、なまなましいところをわからせることではないかと思ったのです。

6, 型にはまったような同じことばで指示していると、子どもは「読めと言っているなあ」という感じで耳に入れていて、その先生の心の底から出てきた迫力のようなものがひびいてこず、みんなを読み引き込めないのです。そのことばに、いわば慣れっこになってしまっていて、読めと言ったなとは思いますが、「よし!」という気持ち、「さあ読むぞ!」という気持ちになれず、本気になって読み出さないということなのです。もちろん、どういう言い方をしても一生懸命に読み出す子どももいます。けれども、そうでない子どものほうが多いと思っています。

7, 子どものことというより、自分の身を振り返って考えたのですが、持っている「力」というのは使い切った時に伸びるもののようです。大してない力でも、ありったけ使おうと、また、どこから湧いてくるのではないかと、誰かが哀れに思って賜るのではないかと私は思いますが、使い切らないことには湧いてこないようです。かわいそうになるほど、持っている力をみな使って途方にくれるようにすることが、次の力を得るもとなるようです。

8, どういう違いであると、説明しにくいところを、自分の持っているありったけのことばを動かして説明する、そんなとき、とうとううまく説明できなくても、ことばの力は、どんなにか磨かれたと思います。説明できないまま、胸の底にずしっと手応えがあつて、わかったと思ったなら、それが、そのことばがその人のものになったので、説明はできなくても、ほんとうに使えるようになったときなのです。

9, 学校には、よくひとつの学校型の優等生がいて、教師が何か聞いたら、とにかく返事をするのがいいんだと思いこんでいます。何はともあれ、なんでもいいから、とにかく早く答えた方がいいんだ、いや、そうしなければならない、というふうに考えているようです。私はこれはこわいことではないかと思います。ほんとうに自分の気持ちが表せることばでなくても、とにかく適当に答えるというのは、こわいことではないでしょうか。

10, 本はだいたい一遍しか読まないものなのです。めったに二遍も三遍も読まないでしょう。何遍も読ませたかったら、それだけの流れ、必然の場が用意されなければ。

11, 「よく読んでごらん」と先生方はよく言いますが、その「よく読む」というのは、どんなことをすることなのでしょう。もっとよく読むなんて、そんな読み方はありません

12, 書くということは一般の人間にとりましては、心の中を文字にする技術なのです。…うまい文章の書ける人なんかそうたくさんいるものではない。そしていなくてもかまわないのです。自分の心を文字化することができたら、生きる技術としての書く力は育ったといえるのではないのでしょうか。

13, どんな考えでも、たとい、よい考えと思わなくても、これかなと心に出てきたことは、どんどん書いて、字で書かれた「目に見えるもの」にしていくといいのです。すると頭の中だけで、あれこれ思いくらべていた間とは違って、だんだん、光がさしこんでくるように、いろいろな考えの区別がついてきます。…ふしぎに結論が出てくるものです。

14, 最初にぱっと思いついたことばを飲み込んで、使わないといいんです。